

## 『真に、四旬節を生きる』

— 苦しみの中にある、世界中の新型コロナウイルス感染者の為に、ともに祈りましょう —

清川泰司神父

新型コロナウイルスの感染拡大を危惧し、大阪大司教区前田万葉大司教は教区内の3月中の公開でのミサを中止しました。この影響で、信徒の中には、神とのつながりを実感できない日々が続く事に不安を感じている方もおられるでしょう。本当に、思わぬ形で四旬節を迎えました。

この新型コロナウイルスは、私たちの日常生活を蝕み、さらにカトリック信者の信仰における日常をも奪っています。そして、時が過ぎる中で、より先が見えなくなり、人々の不安を大きくしています。こんな時だからこそ、ミサが必要だという人もいるでしょう。

ただ、新型コロナウイルスは、教会にとって厄介な細菌です。それは、感染しても病状が出ない人がいる事、飛沫により感染する事から聖堂でのミサが濃厚接触の場となり危険な場と化す事、発症した場合の死亡者の多くが高齢者や基礎疾患を持った人とされている事、そして、今後、医療機関が危機的状況となる事が予想され、また治療方法がないことから、ある人は死に至る事。これらの点から、ミサの中止は妥当だと考えるのです。

そして、もう一つの問題として、現状を考えるとマスコミの感染者に対する配慮の無さと、世間の噂、そしてソーシャルネットワークにおける感染者への反応に問題を感じるのです。私も含め人間は、自らの不安から感染者を特定することに走り、感染者を苦しみに追いやる傾向があるのです。本来、ウィルスが悪いのであって、ウィルスに感染した人が悪いのではないのです。苦しみにある人への想像力の無さという点において、福音の視点から人間は進歩していないと感じます(過去の悲劇＝ペスト、ハンセン氏病、結核、エイズなどなど)。福音の視点から成熟していない社会状況にあって、また、福音理解の弱い信者が感染し、もし、その人が精神的にも弱い人であるならば、二次被害が生まれるのではないかと危惧するのです。このような事からも、現場を受け持つ私自身、大司教が公開でのミサ中止を決断した事は、大変助かる事でもあるのです。

私たち信者は、不安な時こそ、福音のイエスを思い起こす必要があります。それは、キリスト自身、世から弱くされ、偏見を受ける人々の側に立っている事を思い起こすことです。そして、私たちも、キリストの側に立ち、世界の感染者、そして、そのご家族の為に、祈りをささげる事が必要なのです。

「神の御心」を生きたイエスの言葉と行いを鑑みた時、「四旬節」は、すべての人が兄弟姉妹となれない愚かな現実を見る期間でしょう。そして、「復活」は、すべての人が兄弟姉妹となり愛し合う世界を望む神と繋がり生きる事と言えるでしょう。この点で、イエスは、人間の様々な利己的野心と欲望、つまり、自分の利益しか求めず、兄弟姉妹である弱くされた者への痛みに対する想像力を欠いた人々により、十字架の刑に処せられました。神は、この出来事を通して人間に普遍的未熟さに気づかせ、イエスの死と復活により「神の御心」に立ち返り生きる「復活のいのち」、つまり「神の似姿」として地上に生きる道を開いたのです。

この意味でも、この不安な状況だからこそ、私たちの信仰の在り方が問われるのです。私たち信者は、これまでミサにより「神の御心」を知る恵みを頂き、また、ご聖体によりキリストに繋がる機会を、存分に与えられてきました。それがゆえに、ミサが中止された今こそ、利己的な在り方から解放され、すべての人の救いを望む「神の御心」に結び付き、真に、「御心が天に行われるとおりに、地にも行われますように」と願う事が求められます。この祈りの心によって、新たにされ、「神の御心」に立ち返り、「復活のいのち」によって、信仰が育まれるのです。